

「読むこと」における言語活動を重視した中学校国語科授業の一考察 —小学校の指導に積み上げる授業づくりを通して—

佐野 恭子

平成24年4月から、中学校において新学習指導要領が完全実施となる。国語科では、言語活動例が内容に入り、言語活動例を通して指導事項を指導することが求められている。

本研究では、重視される言語活動を「課題解決型の言語活動」としてとらえ、本県生徒の実態から「読むこと」の領域における授業づくりに焦点をあてる。系統的な指導を意識して生徒の既習事項を想起し指導に生かすことで、当該学年の指導事項の習得を効果的に進めることができると考え、小学校の指導に積み上げる言語活動を重視した授業づくりに取り組んだ。

先行研究の分析から授業を構想する視点を整理し、身に付けたい力の明確化、課題解決的な言語活動の設定、既習事項の活用、交流の場の設定の4点に留意して二つの授業を構想した。研究協力員との実践を通して、言語活動を重視した授業における系統的な指導の意義を考察した。

〈キーワード〉 言語活動、読むこと、指導の系統性、指導事項の明確化、交流

I 主題設定の理由

今回の学習指導要領の改訂で、各教科等における「言語活動の充実」が方針として総則に掲げられた。そのため国語科は、各教科等における言語活動を円滑に進めるための言語能力を育成する教科としての役割が、一層強まった。これと並行して国語科では、従来、指導計画の作成と内容の取り扱いに示されていた言語活動例を指導内容に位置付け直し、指導事項を言語活動例を通して指導するという「言語活動の重視」として「言語活動の充実」を図る。これらの要求に応え、子どもたちに「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力」（中教審答申）を育成するために、国語科の授業改善が求められている今、どのような点から取り組めばよいのだろうか。

福井県では、学力向上に向けた授業改善の1視点として、小・中学校の指導の系統性を重視した授業づくりを提唱し、授業づくりの資料「GOOD授業ナビ」や県学力調査の報告書等で取り上げている。この系統性を重視する点も、学習指導要領国語科改訂の趣旨の一つであり、学習指導要領解説「国語編」の巻末に、3領域1事項ごとに義務教育9年間の目標と指導内容の系統表が掲載された。この系統表により、国語科の指導内容が系統的・段階的に上の学年につながっていくことが明確化した。今後は、指導の系統性を重視した確かな国語の力の育成を目指した授業づくりが進んでいくことが期待される。

本研究においても、授業改善の視点として系統的な指導に着目する。言語活動を重視した授業づくりには、習得を図る指導事項の系統性を把握することや、設定した言語活動を達成するために必要となる言語の力は、どの学年の指導内容とつながるのかを確認することが必要になると想定される。特に中学校では、小学校においてどのような指導がなされてきたのかを把握し授業に生かすことで、生徒は既習内容を手掛かりに学習することができ、当該学年の学習にも意欲的に取り組めると考える。

以上の点から、教材内容を教える指導に陥りやすい「読むこと」の学習に注目し、小学校の指導に積み上げるといった系統的な指導の視点から、言語活動を重視した授業をどのように実現していくことができるのかを、授業構想と実践を通して探ることとした。これにより、来年度から新教科書での学習が開始される中学校国語科の言語活動を重視した授業づくりの一助にしたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の目標

現行の教科書教材を用いた「読むこと」における小・中学校の系統的な指導を意識した言語活動を重

視する授業実践を通して、言語活動を重視する授業づくりには、系統的な指導の視点が欠かせないことを明らかにし、中学校国語科の授業改善の可能性を探る。

Ⅲ 研究の方法

- 1 「系統的な指導を意識した言語活動を重視する授業」を構想するために必要な要素を、国や県の学力調査や二つの先行研究の分析から整理する。
- 2 「読むこと」における小・中学校の系統的な指導を意識した言語活動を重視する授業を構想する。
- 3 研究協力員の先生と授業実践し、成果と課題を考察する。

Ⅳ 研究の内容

1 授業改善の必要性を探る

(1) 国語科において求められる「言語活動の充実」

今回の学習指導要領の国語科改訂における要点の一つは、言語活動の充実である。これまで「指導計画の作成と内容の取り扱い」で示されていた言語活動例が内容の(2)に移り、学年ごとにより具体的な記述で示されている。学習指導要領解説では、「各学年の内容の指導に当たって、(1)に示す指導事項を(2)に示す言語活動例を通して指導することを一層重視したため」であると述べられている(下線筆者)。言語活動が一層重視される必要性は、解説の次の記述で見ることができる。

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう内容(2)に社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、批評などの言語活動を具体的に例示している。

この言語活動は、「課題を探究することに役立ち社会生活において生きてはたらく国語の能力を育成するため」(富山2010a)に設定されているので、その目的にかなった質を実現することが求められるという点で、重視されている。富山(2010a)は、この新学習指導要領で求められる言語活動を「課題解決型の言語活動」と名付け、その質を実現するための要素を次のように整理している。

課題解決型の
言語活動

- 課題の設定から解決に至るプロセスを含んでいる。
- 活動の目的・意図・場面・相手などが明確である。
- 他教科等の学習や社会生活の中で、同様のことを行うことがある。
- 当該学年の指導事項を効果的に指導できる。

要素として整理することで、次のように具体的に考えることができる。課題の探究に役立つためには、課題解決型の学習に取り組む必要がある。また、解決したいと主体的に思える課題であるためには、何のために、どのような場面で、どのような相手に対しての言語活動なのかが明らかであることが求められる。もちろん、指導事項を指導するために行う言語活動であるため、どんな指導事項を習得するための活動かが明確であることが求められる。さらに、実生活の中で必要とされる言語活動であれば、「社会生活において生きてはたらく国語の能力」の育成につながるのである。

本県の中学校国語科研究の流れを見ると福井市の中学校教育研究会国語部会では、平成16年度より「つきたい力を明確にした国語授業づくり」と題して「実践事例集」を発刊している。各指導領域ごとに付けたい力(指導事項)を明確にした授業実践が進められていることが分かる。しかし、「指導事項を言語活動例を通して指導すること」は、これからの課題と言えるだろう。本年度から新学習指導要領に基づく新教科書での学習が小学校で開始され、その教科書(本県は光村図書を採択)では、各教材を通して付けたい力にふさわしい言語活動が明示されている。例えば、『大造じいさんとガン』

では、「作品を自分なりにとらえ、朗読しよう」（光村図書国語五）のように、「朗読する」という言語活動を通して読解するように設定されている。そのような学習を行ってきた生徒が入学してくる中学校においても、「指導事項を言語活動例を通して指導する」ことは避けられないことだと考える。

(2) 「読むこと」における言語活動を重視した授業の必要性

「指導事項を言語活動例を通して指導する」ことは、国語科における授業改善を提起していると考えられる。それは、「国語科における言語活動の充実（中学校）」の中で、三浦（2008）が以下のように述べていることから考えられる。

教室で生徒が国語（という教科）を学習するという事は、「言語活動を行う」と同義であるべきである。

しかし、これまでの国語教室では（「国語」の時間では）、このことが必ずしも十分ではなかったと言えるのではないかと。生徒たちの多くが、「国語って何を学習すればよいのか分からない」という疑問を持っていることがさまざまな調査から明らかである。さらに問題となるのは、国語科教師の多くが、心のどこかに「文学的な文章の詳細な読解」こそが、国語の授業であると考えてきたことにあるのではないだろうか。

これまであいまいになりがちであった何のためにこの教材を読解するのかという点を指導事項（教材の読解を通して付けたい力）として明らかにし、その力を育成するためにどのような学習活動を言語活動として行っていくのかを想定し、授業を行うことが求められているのである。本研究では、三浦が指摘するように、学習が教材の内容理解に陥りやすい「読むこと」の領域の授業にこそ、「指導事項を言語活動例を通して指導する」という視点を取り入れるべきだと考える。

次に、本県の生徒の実態から言語活動について考えたい。図1（第59次福井県学力調査における学習や生活に関する調査結果）から、目的に応じて読み、表現する学習の状況が見えてくる。調査対象であった平成22年度の中学2年生はそのような学習について「している・どちらかといえばしている」の合計は、48.7%で、小学校の同じ項目結果（65.7%）と比較して、17%も低い。この生徒自身の「〇〇のために読んで、自分の考えを表現する」という学習体験の意識の低さは、中学校国語科の授業改善の必要性を示していると思われる。実際に、福井県では、平成20年より「GOOD授業ナビ」が配付され、その中で、目的をもって読み、互いの考えを交流するという言語活動を重視した授業づくりが提唱されている。例えば、教材文『少年の日の思い出』（光村図書 国語1・東京書籍 新しい国語1）には、『僕』の罪を裁判で裁こうという学習課題を設定し、ディベート形式の裁判という言語活動を通して、「読むこと」の指導事項を指導するという授業（福井県教育委員会2010）などである。

以上の点から、「読むこと」における言語活動を重視した授業づくりは、国語科の授業改善の柱になると考える。

(3) 福井県学力調査結果に見る小学校の指導につなげる授業改善の必要性

本県では、昭和26年から県独自の学力調査が継続されている。全国学力・学習状況調査の開始に伴い、県学力調査においても、第58次（平成22年2月実施）調査より活用問題の出題が開始された。ここ数年の福井県学力調査と全国学力・学習状況調査結果から本県の中学校国語科の学習における課題を表1にまとめた。そこから「読み取ったことを基に、自分の考えの根拠を説明する力」や「文

中学校国語 15 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしていますか。

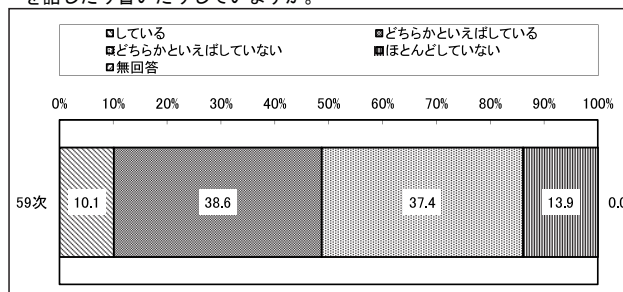


図1 学習や生活に関する調査(59次報告書より)

表1 県学力調査と全国学力・学習状況調査から見られる本県の課題一覧表

	55次(H18)	56次(H19)	57次(H20)	58次(H21)
A 話すこと・聞くこと	説得力のある表現の仕方に注意して聞き取る	説得力のある表現の仕方に注意して聞き取る	表現の仕方をとらえ、注意して聞き取る	説得力のある表現の仕方に注意して聞き取る
B 書くこと	資料から読み取ったことに基づいて、自分の体験や具体的な事実を踏まえた意見を書く	文末表現が異なる文を指摘する	課題にかかわる自分の経験を想起して書く	読み取ったことを基に、自分の考えの根拠を説明する
C 読むこと	文脈における語句の意味を正確にとらえ、内容を指摘する 文章の展開に即して内容をとらえる	文章の展開に即して、主題を読み取る	文章の展開に即して、主題を読み取る	資料から必要な情報を取り出し、共通するところをとらえる
	語句の意味や構成・展開を正確にとらえ指摘する	文章の展開を確かめながら要旨をとらえる	意見に表されているもの見方や考え方を説明する	文章の展開に即して内容を指摘する、事実と意見などを読み分ける
言語事項	文の成分の照応	正しい筆順 文の成分の照応	小学校6学年までに学習した漢字を用いた熟語を書く	小学校6学年までに学習した漢字を用いた熟語を書く
全国学力・学習状況調査から見られる福井県の課題 ()は設問を示す		文脈における自然描写を的確に読み取る(A3-1) 比喩表現等の表現技法に注意して内容をとらえる(A3-2) 作品の展開や心情の変化に着目して朗読する(B2-2) 資料に表れているもの見方や考え方をとらえ、伝えたい事柄や考えを明確にして書く	辞書を活用して慣用語の意味を適切に書くことや漢字が表している意味を正しくとらえる 資料に書かれている情報の中から必要な内容を選び、伝えたい事柄が明確に伝わるように書く(B1) 表現に注意しながら読み、読み取った内容を条件にあった表現に直して書く 二つの意見文を比較しながら、論理の展開に着目して評価・批評すること(A3-1)	辞書を活用して、語句の意味を適切に書く(A8-7) 詩や短歌、文章を読んで内容を把握したり、解釈したりする(A7-1) 資料に表れている内容や工夫を読み取り、自分の表現に役立てて書く(B1-3)

58次 中学校国語 指導改善の概要

【概要】
目的や意図に応じて多様な資料を読み、自分の考えを説明する学習の充実が必要

【特徴的な指導事例】(p.95)
結論を明確に示すために論点を精選する指導の工夫

59次 中学校国語 指導改善の概要

【概要】
既習事項を想起させ、それを使いながら思考する授業づくりや、交流を通して学び合う授業づくりを進めることが必要

【特徴的な指導事例】(p.77-79)
話し手の意図を考えながら目的をもって聞き、メモを取る学習 ※下線筆者

図2

章の展開に即して主題や要旨をとらえ、課題に即して表現する力」「複数のテキストを比較したり関連づけて読解する力」の育成など、目的をもって文章を読むことや、伝える相手を意識して、読み取った文章から根拠を挙げて分かりやすく表現する力の向上が課題として見えてくる。これらの課題を克服し、さらに学力向上を目指した授業を進めることが求められている。そのため県の学力調査では、調査結果から課題を分析し、課題に対する具体的指導例を記載した報告書を作成している。特に活用力問題導入後の報告書では、分析結果を基に、授業改善のための提案がなされている。例えば、第58次と第59次学力調査の報告書で示された中学校国語科の指導改善の概要は、図2の通りである。

第58次の報告書では、学習課題を達成するため、個人の学習→グループ学習→個に戻る学習→学習成果をグループで評価し合うという一連の学習プロセスを想定した指導事例が提示されている。調査から見られた課題点を克服するために、それにふさわしい言語活動を想定した指導事例が提案されているのだ。また、第59次の報告書からは、小学校の学習を想起させ活用する授業づくりの提案がなされている。図2の【特徴的な指導事例】は、小学校で学習したメモの取り方を想起させ、それを活用することで、中学生として求められるメモの取り方を生徒間の交流から見つけ合い工夫していく流れが想定されているものである。

これらの報告書からも、国語科における授業改善として、課題解決的な言語活動を重視して、これまで以上に系統的な指導を意識した小学校の学習に積み上げる授業づくりの必要性が見られる。

2 授業構想の要素を整理する

課題解決的な言語活動を重視した小学校の学習に積み上げる授業を構想するためには、どのような要素が必要とされるのか。課題解決型の言語活動を柱に、授業構想の要素を整理する。

(1) 全国学力・学習状況調査問題に見る言語活動を重視した授業構想

「読むこと」における言語活動を重視した授業を教師自身が体験してきていないため、具体的に授業を構想することは容易でないと思われる。そこで、まず「課題解決型の言語活動」のイメージとして、全国学力・学習状況調査の「活用」に関する問題を参考にする。「活用」に関する問題は、調査のねらいに適した活用する基礎・基本的な力を明確にして、それに応じた実生活で想定される多様な言語活動を設定した上で作成されているからである。

① 「活用」に関する問題の枠組み

全国学力・学習状況調査の解説資料（国立教育政策研究所2011）では、『『全国的な学力調査の具体的な実施方法等について（報告）』に示された例や学習指導要領に示された言語活動例を参考に、実生活の具体的な場面や生徒が授業などで実際に行っている言語活動を想定したもの」を基本とすると述べられている（下線筆者）。解説資料には、各大問ごとに《出題の趣旨・学習指導要領との関連・評価の観点・正答》の表があり、問題作成に際して想定された学習指導要領に示されている言語活動例も明示されている。例えば、平成22年度B主として「活用」に関する問題③文学的な文章を読む（「吾輩は猫である」）について見てみる。「夏目漱石の『吾輩は猫である』の一部分を取り上げ、特徴的な表現に注意しながら読み、面白いと感じた点について話し合う場面」が設定してある。そして、「文学的な文章を読むことの指導における話し合いという言語活動」を通して、読解する力や自分の考えを説明する力を調査する問題となっている。

② 授業のイメージと重なる「活用」に関する問題の構成

調査問題で確かめようとしてされている力は、既習の知識・技能を活用して課題を追究していく力である。課題を解決するために、相手意識・目的意識をもって、自分で思考・判断・表現するという過程そのものを一つの言語活動とした問題構成になっている。そのため小問の組み立ては、図3のように、目的（学習課題達成）に向かって、読解して自分の考えを明確に説明する流れになっている。そして、最後は、「あなたは、…どのような共通した面白さがあると考えますか」と自分の考えを明らかにさせた上で、交流の場で相手に自分の考えを明確に伝えるために条件にしたがって文章

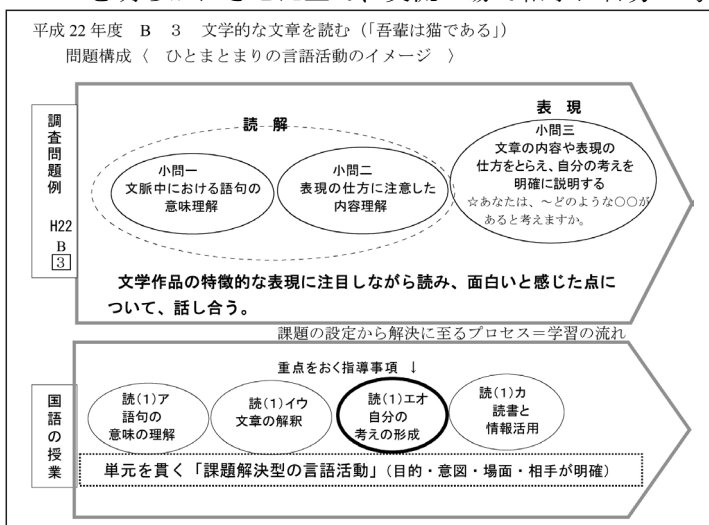


図3 問題構成と授業構成との関連図

に書いていく。

このような問題構成は、「課題解決型の言語活動」の四つの要素を踏まえた、ひとままとまりの授業を構想する思考過程と重ねてみるができる。

さらに、「活用」に関する問題は、読解したことを表現し交流するという学習過程になっている点にも注目したい。従来の読解中心の授業で培われてきた互いの読みを交流するための手立てを、指導事項を身に付けるために言語活動を通して目的をもって読解する授業づくりに生かしていくことが必要だと考える。

(2) 先行研究から探る授業構想の要素

言語活動の設定と学習の系統性を重視した先行研究に注目し、授業実践の留意点から要素を探る。

① 目的をもって伝え合う言語活動を設定した授業づくり ～京都市総合教育センターの研究より～

中学校国語科における言語力の育成に向けて
—目的や意図に応じて読み、相手に伝える能力を高める言語活動の工夫—

この研究（白井2010）では、これからの国語科の学習では、「テキストを目的や意図に応じて読み取り、書くことで自分の考えをまとめ、それを的確に表現し伝え合っていく言語力の育成」のため、「授業では、習得すべき力を認識することで主体的に学べる言語活動を設定」することが必要だと述べている。そのため、「単元構想をもつこと」「領域を関連させること」「グループ学習において日常

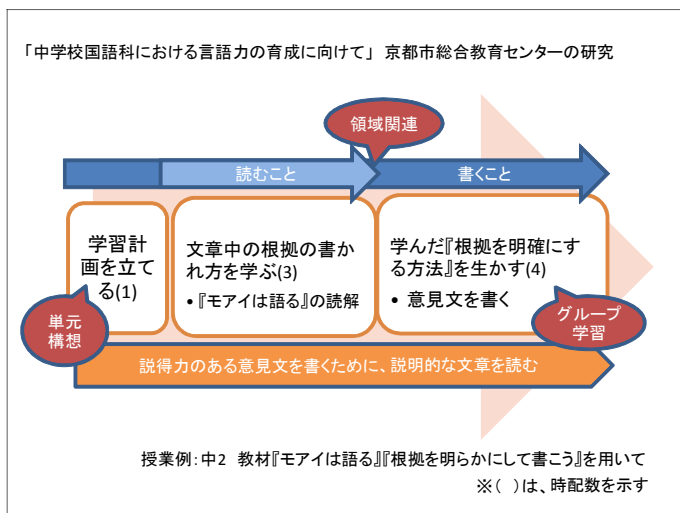


図4 授業モデル

的な言語活動を行うこと」に重点をおき、四つの授業実践を示している。ここで実施された授業をモデル(図4)で表すと、課題解決型の言語活動で貫かれた単元設定となることが分かる。

この研究では、次の優れている点(○)に注目し、課題(●)について考えた。

- 単元を貫く言語活動を設定することで、領域の異なる複数の教材を1単元にまとめ、学習の目的を明確にするため生徒自身が学習計画を立てている。
- 「グループ学習」を授業の中に取り入れ、互いの考えを交流する時間を効果的に設けている。

- 長い単元構想では、継続的に他の単元も構想して実践することが難しい。
 - 単元で育てたい力を育成するための学習過程の一つとして交流を位置付ける点を重視する。
- 授業実践記録からは、グループ学習により生徒が生き生きと学習し活性化している様子が見られる。しかし、身に付けたい力に対して、個の学習に生きてくるグループ学習であったかどうかという点は、不明瞭である。紹介されている交流についての生徒感想例は、「最初はなかなかできず難しかったけれど、友だちと相談してだんだんやり方もわかって、読むだけでなく自分で書くのも楽しかった」など、交流についての効果を感じているものの、学習内容そのものに対するものではない。グループ学習を取り入れる際は、生徒の学習にとって意味があるものかどうかを吟味することが必要だろう。
- また、評価し合う目的の交流においては、本時の指導に基づいた中学生の学習に適した評価項目が必要だろう。グループ交流の相互評価の場面で「発表者は、相手に自分の書いた内容を、より明確に伝えるためには、『具体的な例示』や『相手に届く声』も重要であるということ学ぶことができたと考えられる」と考察している例に注目したい。具体例を挙げることや声の大きさ等は、小学校の「話す・聞く」の指導において既習の指導事項である。学習の系統性の視点から、そのような指導を先に行い確認した上で、中学校の指導を積み上げていくようにしたい。
- また、長い単元構想では、継続的に他の単元も構想して実践していけるのかという不安もある。生徒の国語の力を育成するためには、継続して「課題解決型の言語活動」を重視した授業を行うことが必要である。継続的に授業改善に向かうことが可能となる実践を構想したいと考える。

② 指導事項の系統性を意識した授業づくり ～愛知県総合教育センターの研究より～

「活用」を意識した授業改善と評価の在り方に関する研究(国語部会)
国語科における「活用」を意識した授業における指導の系統性と評価の在り方

この研究(愛知県総合教育センター2011)は、平成22年度から2か年にわたる「活用」を意識した授業に関するものである。「国語科の授業において、『基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成する』という場合の『活用』の力は、課題を解決するための学習活動としての言語活動を設け、児童生徒が身に付けている言語能力を活用させることによって育むことができる」と考え、平成23年度は授業構想の方針を3項目設け、小・中・高の3校種でそれぞれ授業実践を行っている。(下線筆者)

ここで実施された授業の一つをモデルで表すと、図5のようになる。言語活動は学習過程の一部分での設定だが、「読むこと」の領域で指導事項の系統性を重視して2教材をつなぐ単元構成である。

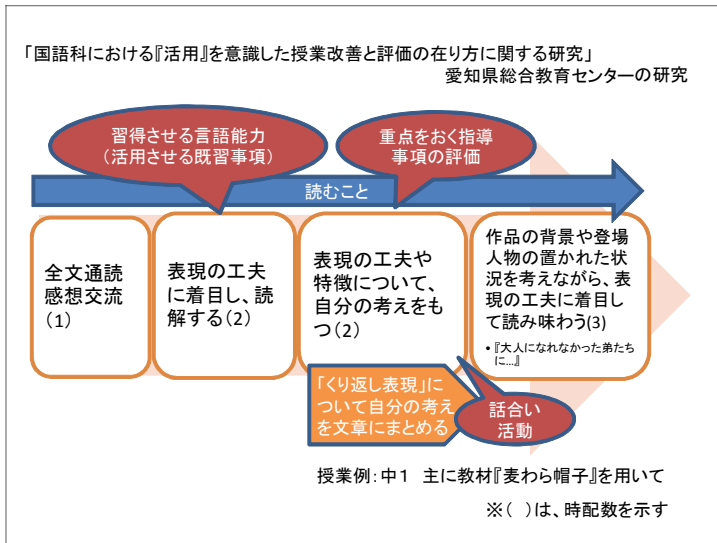


図5 授業モデル図

練るために、授業者は座席表に生徒一人ひとりの意見や学習状況などを書き込んで整理している。個に応じた学習の進め方である。課題解決型の言語活動を行う際には、一人ひとりの学習状況を把握した上での指導が必要だからであろう。この点は、授業実践の中で同様に大切にしたいと考える。

また、3校種の授業者同士で実践を吟味し合っているため、指導事項の系統性を重視した授業づくりは進んでいる。特に高等学校の実践は、中学校での学習を踏まえた上で、今後の授業構想にまで言及している。しかし、教師一人ひとりが授業を進める場合は、各教材ごとの重点をおく指導事項の違いを把握し、指導事項の系統的なつながりを理解した上で、授業構想していくことが大切となる。そのような授業実践を積み重ねていくことを実現していく必要があると考える。

(3) 課題解決的な言語活動を重視した小学校の学習に積み上げる授業構想の要素

これまでの分析から、授業を構想する要素を次のように整理し、モデル図(図6)にまとめた。

- ① 教材を通して、身に付けたい力を明確にする。
- ② 目的意識をもって学習できるように、単元を貫く課題解決的な言語活動を設定する。
- ③ 指導の系統性を意識して、既習事項を活用する。
- ④ 自分の考えをもち、意見を交流させる場を設定する。

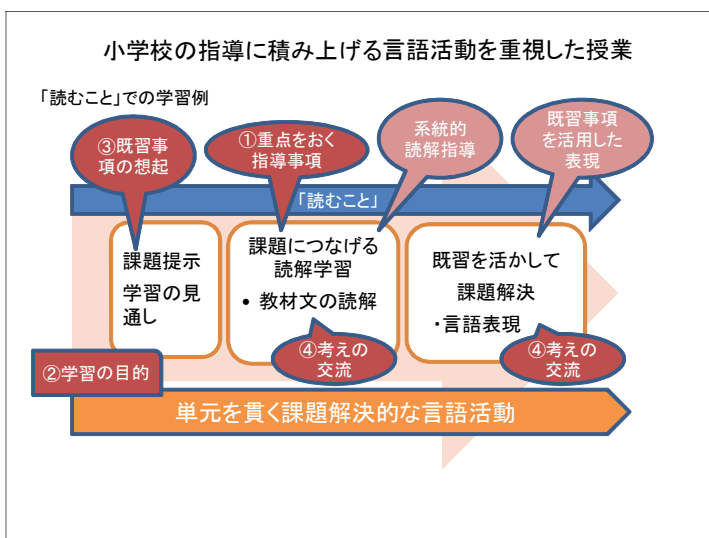


図6 目指す授業のモデル図

この研究で注目した点は、指導と評価の在り方について、授業実践を通して考察していることである。平成23年度の発表資料には、評価の観点を絞って学習状況を的確に把握し、指導と評価を一体化することを研究の重点におき、「国語部会では1時間ごとに指導のねらいを踏まえて評価の観点を絞り、指導に生かす評価の場面と、評価した結果を記録に残す場面を意識しての実践を行った。」とある。

授業実践では、重点的に指導する事項に対して評価規準を設け、その達成状況を一一人ひとりの生徒が書きまとめたものから評価している。また、授業中の支援の方策を

- ① 教材の特徴を分析し、重点をおく指導事項を「身に付けたい力」として明確にする。
- ② その指導事項を生徒が目的意識をもち学習できるように、単元を貫く課題解決的な言語活動を設定する。
- ③ 指導の系統性を意識して、設定した課題解決に向けて、まず既習事項を想起させる。また、学習過程においても、系統的な指導に配慮する。
- ④ 一連の学習の流れが、個々の生徒の学習の広がりや深まりにつながるよう交流の場の設定を工夫する。

3 「単元構想表」を活用した授業構想

授業を構想する要素を踏まえ、系統的な指導を意識して課題解決型の言語活動を設定した授業を、現行の教科書教材を用いた「読むこと」における授業として実践するために、「単元構想表」(富山2010b)という考え方を参考にしたい。富山は、「指導事項と言語活動例から授業を構想する」という言語活動を重視した授業を進めるために、次の三つの長所を挙げて「単元構想表」(図7)に基づき授業を構想することを提案している。

- ・付けたい力が明確である。
- ・単元を貫く言語活動が位置付いている。
- ・領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の関連が明らかになる。

これらの長所は、整理した授業構想の四つの要素(63ページ参照)と重なる上、「単元構想表」を活用して授業を構成することは、次のような点で有効だと考える。(番号は4要素を示す)

指導事項	言語活動例 ア・イ・ウ・エ・オ・他	学校(第 学年・国語総合)「書くこと」		留意点・他	時
		学習活動	評価規準		
イ					
ウ					
エ					
オ					
カ					

関連する〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

〔国語への〕関心・意欲・態度 に関する評価

*「留意点・他」の記入は指導事項に当たっての留意点、評価規準に当たっての留意点、国語の学習活動のアイデア、教科書・教員の工夫

図7 単元構想表

- ① 指導する領域の指導事項が一覧できるので、それに対応して学習活動を記入できる。それにより、指導事項に基づく学習過程を意識した学習の流れを構想することができる。
- ② 言語活動例から単元の学習に適切な言語活動の設定を視覚的に構想することで、生徒の学習意欲を高める学習課題を、単元を貫く言語活動として設定することができる。
- ④ 全領域の指導事項には「交流」に該当する項目があるため、自分の考えをもち、意見を交流させる場の設定を、学習過程に位置付けることが必要となる。

授業構想の4要素との重なりを見ると、「③ 指導の系統性を意識して、既習事項を活用する」の要素と「単元構想表」の長所との関連は見えない。この点について、富山は「単元の最初に目的となる活動が示されることにより、生徒は関連する既習事項を想起すること」になると説明している。

図8のように、言語活動例は小学校や前学年等で既習の内容なので、実際に活動するためにどんな学習をするのか等の見通しを生徒がもつことができるのである。教師も既習事項を把握し、活用しながら今回習得させたい指導事項をどのように生徒に意欲的に学ばせることができるかを大事に授業を構想することができ、指導の系統性が見えてくる。

C 読むこと(中) 第1学年 言語活動例

ウ 課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること

(小) 5.6年C読むこと
イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること

↑

(小) 5.6年B書くこと
エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと

図8 既習から設定されている言語活動例

また、先行研究で課題とした評価の点についても留意することができる。指導事項が絞られているので、その事項についての評価規準を設定するようになっている。さらに、富山が長所として挙げているように、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項や国語への関心・意欲・態度についても、どの学習過程で重点的に評価するのかを考え、評価規準を設けることができる。従来、指導案作成の際に指導の観点を明示しているが、それと比べて授業の流れに沿った思考で、評価規準を想定できると思われる。

このように「単元構想表」を活用することで、本研究の「言語活動の充実」と「系統性の重視」の二つの視点をもたらすことなく、生徒の主体的な学習を構想することができるのである。生徒たちは小学校で、様々な表現活動を通して指導事項を学んできている。その学習成果を生徒自ら意識して中学校での学習を進めることで、より主体的に国語の学習に取り組む生徒達の姿が見られるのではないだろうか。「単

元構想表」を活用して授業を構想し、研究協力員と実践した。

4 「単元構想表」を活用した授業構想と授業実践

(1) 実践1 中学校1学年 教材：光村図書 国語1『麦わら帽子』(物語文)

① 小学校の既習事項を想起し生かす言語活動を設定した授業構想

重点的に付けたい力：C「読むこと」第1学年(1)エ 自分の考えの形成
課題解決型言語活動：おすすめの本について、人物の変化を表す表現に注目して紹介する。

既習事項の活用：課題に沿って本を読み、引用して紹介する。(64ページ図8参照)

個の考えの交流：主人公の心情の変化について話し合い、意見をまとめる(2時)

『麦わら帽子』を紹介するカードをグループで発表する。(5時)

作成した紹介カードを使い、おすすめの本を紹介する。(8時)

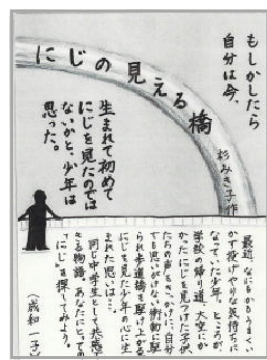


図9 紹介カード

この教材は、中学1学年の二つ目の物語文である。主人公のマキ(小学校中学年ぐらいの女の子)が、大事にしていた「麦わら帽子」の中に傷ついたカモメを入れ、命がけで守った体験を通して成長した様子を描いている。物語の最初と最後で対照的なマキの描写や、兄の視点からのマキの様子に着目することで、マキの成長が見えてくる。また、命がけの体験の場面は、擬人法や五感に訴えかける表現が多用された短い文で綴られ、マキの心細さや危機感迫る描写が特徴的である。この教材の学習を通して、人物の心情の変化を中心に読み取り、その変化が分かる表現の特徴について着目することができる力【C「読むこと」第1学年(1)エ 自分の考えの形成】の育成を重点的に指導したいと考えた。そこで、「おすすめの本について、人物の変化を表す表現に注目して紹介する」という課題解決型の言語活動を設定した。図9のような「本の紹介カード」を一人ひとりが作成し、それをを用いて自分のおすすめの本を学級全体で紹介するという課題である。その課題のために、全員で『麦わら帽子』を読み取り、一度紹介カードを作り発表し合い、同じような読解の手法でおすすめの本の紹介カードを作成し発表するという学習過程を構想し授業を行った。単元構想表に整理すると以下の通りである。

言語活動例		単元構想表(第1学年)「読むこと」: 表現に着目して、物語を紹介しよう ~表現の特徴について自分の考えをもつ~			
指導事項	ア・イ・ウ・他	学習活動	評価規準	留意点 他	時
ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。	おすすめの本について、人物の変化を表す表現に注目して紹介する。	◎ 主人公の様子や気持ちが表れている表現を探し、その心情の変化についてグループで話し合い、発表ボードにまとめる。		個々人の読み出し合えるように、本文に印付け、付箋紙記入、話し合いという流れにする。 個々人の話し合いのため、付箋紙を整理する作業シートと発表ボードを用意する。	2
ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。		○ 無人島にいる場面を展開に即して読み、主人公の心情の変化について考える。	主人公の心情の変化が分かる表現を見つけ、それらに関係付けて、主人公の言葉にできなかった心情を文章に書いている。	個々人の学習のつながりを意識するため、意見の配置を工夫した資料を配付する。読解用に注目する場面だけを取り上げたワークシートを用意する。	3
エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。		◎ 主人公の変化が一番表れていると考える表現を選び、その理由を文章に書きまとめ、自分の「麦わら帽子」の紹介カードを作成する。	主人公の変化を自分の言葉で意味付け、その読みが伝わるような「麦わら帽子」を紹介するための引用文を選び、それを選んだ理由を文章に書きまとめている。	評 観察とワークシートの記述内容で評価する。主題に即した引用文を選び、展開に即した根拠を挙げているものをAとする。	4
オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広げること。		◎ 「麦わら帽子」を紹介する際の引用文とそれを選んだ理由をグループで発表し、互いの読みを交流する。		個々人の交流する目的を明確にするために、交流する観点をワークシートに記載し意識させ、交流会の振り返りを書かせる。	5
カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。		○ おすすめの本を紹介するために、変化したもの・あらすじ・引用文の視点で読み直し、本の紹介カードを作成する。本の紹介カードを使って学級で本の紹介をし、交流した感想を書く。	物語の展開の中での変化について自分の読みを表にまとめ、その読みにふさわしい引用文を選び、本の紹介カードを作成している。	個々人の第3時のワークシートで学習した変化をまとめる枠を使用したワークシートを用いて、読み取りを支援する。 個々人の紹介カードは、学年の掲示板に掲示する。	6 7 8
関連する(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)	イ(イ)	語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くこと。	同一語句「まぶしい」の意味の違いを考え、主人公の様子や気持ちを表す語句を付箋紙に書き出している。		
(国語への)関心・意欲・態度に関する評価		自分がおすすめの本について、表現に着目した「紹介カード」を作成し、その内容を進んで紹介しようとしている。	個々人の観察と作成した紹介カード、交流の評価カードの記述内容で評価する。		

*「留意点 他」の記号…個指導に当たっての留意点、個評価に当たっての留意点、個他の学習活動のアイデア、個教材・教具の工夫

② 実践1の成果と課題

実践1を、目指す授業のイメージに合わせて図に表すと、図10のようになる。四つの要素を踏まえた授業構想にしたが、授業実践する中で特に留意したことについて、三つの点から、課題解決的な言語活動を重視した小学校の学習に積み上げる授業づくりについて考察する。

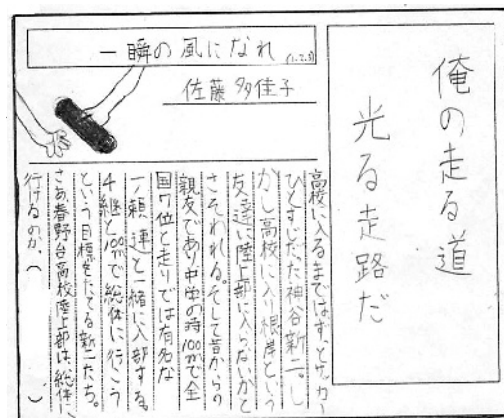
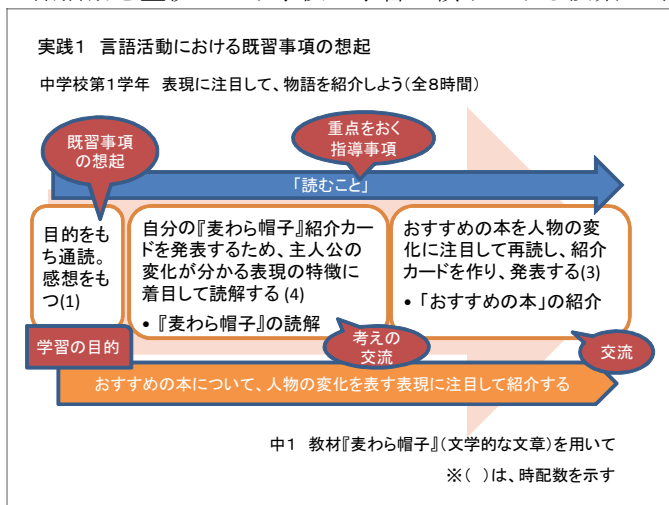


図11 生徒が作成した紹介カード例

図10 授業構想の図(実践1)

ア 単元を貫く言語活動に関する既習事項の想起から「指導の系統性」を目指す。



図12 既習事項想起の様子

第1時は、単元を貫く言語活動「表現に注目して、物語を紹介しよう」のゴールのモデルとして教師の作品を提示し、実際の本と共に紹介した(図12)。学習の見通しをもたせ、目的をもって読解する学習の流れを生み出すための手立てであった。同時に、既習事項を意識して作成した資料「ふり返ってみよう～小学校の教科書に見られる本の紹介の方法～」を配付した。生徒たちは小学校の本の紹介に関する学習を想起することで、自分でもできそうだという見通しをもち、意欲を喚起することができた。

第1時の生徒の感想より

- ・「麦わら帽子」の注目したい表現を見つけ出せるといいと思いました。
- ・今日の学習をもとに本の紹介をしっかりとしたいです。

イ 教材の読解の学習過程と課題を解決するための学習過程との一致を目指す。

言語活動の課題は、全授業の最後に生徒各自が図11のように、注目してほしい表現を示した本の紹介カードを作成し、教師のモデル発表のように本を提示しながらカードを使って本の紹介を行うことであった。そのため、教材の読解学習をどのように課題解決の過程と一致させるかが問題であった。そこで、右のような学習の流れにした。

紹介カード作成時には、学習を生かして自分の力で、物語のあら筋や物語の展開の中で変化したものを意味付けることができるように、『麦わら帽子』の読解学習と同じ形式のワークシートを用意し、一人ひとりの学習支援に留意した。

『麦わら帽子』で注目したい表現とその理由を交流する学習
 ↓
 自分のおすすめの本を「変化したものは何か」という視点で再読し、同じ手法で紹介カードを作成し学級で紹介する。

学習後の生徒の感想より ～読むことに関することへの記述が見られた例～

- ・擬人法などの文章の書き方、主人公の気持ちなどが分かりやすくなった。
- ・マキの変化を探し出すことが楽しかったです。マキの行動や言葉をじっくり読むと、よく分かりました。本を紹介することも楽しかったです。

学習後の感想には、「おすすめの本を紹介するカードを作るのがおもしろかった」という興味

・関心をもって学習できた生徒が25%、感想例のように、読むことに関する力の向上として自覚できたことを記述した生徒が約40%見られた。

ウ 自分の考えをもち、意見を交流させる場の設定とその支援に配慮する。

学習の中で、個の考えを交流することの意義が感じられるように次のような配慮をした。



図13 操作を通じたグループ学習

- ・全員が交流に参加し、グループで互いの意見をまとめていく過程が実感できるように、付箋紙を用いて各自が見付けた表現を出し合う操作活動を取り入れた。(図13)
- ・グループで交流する目的を明確にするために、グループで読解したことをまとめ、ホワイトボードに書く課題を設定した。
- ・第5時の交流では、第2時と同じグループで発表したり、ワークシートに交流するときに留意してほしい観点を記載したり、授業者が口頭で補足説明したりして、交流の意義を深めるようにした。

班での交流後の生徒の感想より

- ・一人一人納得できる意見をもっていて、Kさんなんかは短い文の中で奥深い意味をもっていたのですごいと思いました。
- ・同じ場面を選んでいた人もいたけれど、理由が少し違いました。「言いたくても言えない」というのがいいと思いました。「マキ自身が変わるきっかけになった」というのがなるほどと思いました。

交流に対する教師の支援により、同じ表現に着目して意味付けが違っていることに驚いたり、自分と異なる読みを知り納得したりしていた様子が、感想から分かる。学習後の感想にも、「麦わら帽子でみんなと話しているうちに主人公の気持ちの変化が少し分かりました」と交流の意義を感じている生徒が20%見られた。

授業実践1により、小学校の学習を想起させて進める言語活動は実現できたが、物語文読解の系統的指導の研究には至らなかったことが課題であった。

(2) 実践2 中学校2学年 教材：光村図書 国語2『モアイは語るー地球の未来』(説明文)

① 学習状況を見取り、読解指導に既習事項を生かす授業づくり

実践2では、説明的な文章を教材とした授業実践を行った。実践1では、指導者に系統的な指導の意識が少なかったが、説明的な文章の指導では、中学校1年生の指導の実践もあり、教材研究をより系統的な視点から行うことが可能であった。教材文で指導したい事項は、実践1よりも明らかになったが、どのように生徒の興味・関心を引き付ける言語活動を設定するのが難しかった。

重点的に付けたい力：C「読むこと」第2学年(1)ウ 自分の考えの形成

課題解決型言語活動：二つの説明的な文章を読み比べ、説得力のある文章の秘密を発表する。

既習事項の活用：話題が同じ説明的な文章を比較して読む。(読むこと 小5.6年 力「目的に応じた読書」)

個の考えの交流：「どちらの文章が筆者の主張を伝えるために説得力があるか」について、同じ立場の者同士でグループを作り、互いの意見を交流し合い、各グループの「説得力のある文章の秘密ベスト3」を決定し発表する。最後に、「説得力のある文章の秘密マイベスト3」をまとめる。(5時)

この教材の特徴は、四つの問題提起と結論部分が五段落で構成されている点である。一つ一つの問いについて根拠を示しながら答えを明らかにすることで、イースター島の森林破壊の歴史が綴られるしくみになっている。さらに本論の謎解きを踏まえて、結論部分の筆者の主張へとつなげている。現代の地球とイースター島の悲惨な運命を対比して表現し、読者に強く訴えるという論の展開であり、

大変説得力がある。筆者の構成の工夫や危機感をあおる表現の特徴などに注目することで、説得力のある文章の書き方について学び、自分の「書く」「話す」などの表現に生かすことができると考えた。そこで、この教材の学習を通して、文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめる力【C「読むこと」第2学年(1)ウ 自分の考えの形成】の育成を重点的に指導することにした。そのために、本教材と同じイースター島の文明消滅について取り上げた『イースター島にはなぜ森林がないのか』(東京書籍)という小学校6年生対象の教材と読み比べることを通して、説得力のある文章の秘密を探り、短い文にまとめるという課題を設定することにした。

② 単元構想表で示す授業展開

具体的に授業を構想する前に、実践1の反省を踏まえ、系統的な指導を効果的に行えるように生徒の学習状況の事前調査を試みた。アンケート形式でなく、小学校の既習教材(光村図書4年上『アップとルーズで伝える』)を用いての問いを作成し、チャレンジ問題(図14)として実施した。この教材を使用した理由は、適度な分量で問いと答えの関係が明確であり、説明的な文章の読解に必要な基本的視点を確かめられる文章だったからである。

その結果、文章全体の問題に対する説明が始まる本論を正しく捉えていた生徒は、約69%であった。問題提起とその答えという関係に着目させ、問題提起が含まれているのが序論であること、本論ではその答えが解明され、それを踏まえた著者の主張が結論だとする文章の構造を理解させる必要があると考えた。

調査から分かった生徒の実態を踏まえて、読解の学習過程の中で文章の構成を理解する力を習得させ、習得した力を別の教材との比較読みする過程で活用する学習を構想した。単元構想表として整理すると以下の通りである。

説明文の学習の前に
二年組

○あなたは、何のために説明文を学習すると思いますか。

○次の文章は、あなたが小学校四年生の時に学習した説明文の一つです。説明文を読み取る力を調べるために次の文章を読んで、後の問いに答えましょう。

1. この文章は、8つの形式段落で構成されています。筆者の中谷さんは、この文章で何を伝えたいかたの意図が述べられている段落はどれでしょう。

() 段落 「意見を練で囲もう」

2. 問題提起の働きをしている段落はどれでしょう。

() 段落

問題提起している一文を見つけ、線を引こう

図14 チャレンジ問題

単元構想表(第2学年・国語)「読むこと」: 説得力のある文章の秘密を探ろう ~筆者の意見をとらえ、説得力のある表現を学ぶ~				
言語活動例	ア・イ・ウ・他	学習活動	評価規準	留意点 他
指 導 事 項	二つの説明的な文章を読み比べ、説得力のある文章の秘密を発表する。			
ア	抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むこと。	・筆者の表現の特徴(比喩的表現、対比的表現など)に注意して、『モアイは語る』の結論部分を読む。		結 結論部分に注目させ、内容や要点をまとめるためのワークシートを用意する。
イ	文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。	○ 『モアイは語る』の文章全体と本論の構成について、問いと答えの関係に着目しながら内容を確認する。 ○ 『イースター島にはなぜ森林がないか』の文章の構成を予想し、事例に着目しながら構成を確認する。	・問題提起、筆者の主張をとらえ、文章中の記述を根拠に挙げて文章全体の構成を説明している。	指 レディネス調査結果から、文章の構成(序論・本論・結論)の理解のため、問いと答えの関係に着目させる。 結 『イースター島にはなぜ森林がないか』の読解を支援するため、要点をまとめるワークシートを用意する。 指 個人学習後に、学習班で構成を確認する学習形にする。
ウ	文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめていること。	◎ 「説得力のある文章の秘密ベスト3を決めよう」という課題について、自分の立場を明らかにし、互いの意見を発表し合う中で、自分の考えを深める。	・グループ学習、全体の発表を踏まえて、「説得力のある文章の秘密マイベスト3」として、自分が説得力のある事柄を短い文章で書いている。	評 「説得力のある文章の秘密マイベスト3」として、記述させる。 指 学習後に「見つけた秘密を活かして説得力のある意見文を書こう」という言語活動をゴールとする、「書くこと」の学習行くと、より効果的である。
エ	文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。			6 5
オ	多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめること。	○ ・二つの文章を自分が設定した視点で読み比べ、説得力があるのはどちらの文章か、根拠を挙げて自分の考えをまとめる。	・『イースター島にはなぜ森林がないか』の文章について、構成・表現などいくつかの観点で『モアイは語る』の文章と比較して、説得力があるかどうかについての考えをまとめている。	評 二つの文章を比較する観点を決め、自分の言葉で根拠を明らかにして表現しているかを、ワークシートの記述内容から評価する。
関連する【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】	イ(イ)	抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き、語意を豊かにすること。	「モアイは語る」の結論部分の抽象的な語句を文脈に即して理解している。	
(国語への)関心・意欲・態度 に関する評価			二つの文章を比較して読むことに関心をもち、どちらがより説得力のあるか根拠を挙げながら読もうとしている。	評 学習状況の観察とワークシートの記述内容で評価する。

*「留意点 他」の記号…指指導に当たった留意点、評評価に当たった留意点、指他の学習活動のアイデア、結教材・教具の工夫

V 研究のまとめ

1 研究の成果

「読むこと」における言語活動を重視した授業を目指し、「既習事項の想起」として系統的な指導に重点をおいて構想、実践することで、小学校の指導に積み上げる授業づくりに取り組んだ。二つの授業実践を通して、系統的な指導は言語活動を重視した授業において、次のような意味をもつと考察する。

(1) 授業構想の各要素に共通する視座となる

全国学力・学習状況調査の「活用」に関する問題や先行実施されている授業の分析から、目指す授業の要素を、身に付けたい力の明確化、課題解決的な言語活動の設定、既習事項の活用、交流の場の設定の4点に整理できた。指導事項の検討、設定する言語活動の吟味、活用できる既習事項の確認、交流を支える手立てを探るなど、どの要素にも小中の指導の系統性から考えることが必要とされた。

(2) 交流の場を活性化するための支援の役割を果たす

授業実践する過程では、交流を生徒にとって意義のある学習の場にする教師の手立てが重要であった。特に、生徒が習得している「話すこと・聞くこと」の力が大きく影響する交流の場には、場の設定や教具の工夫などに小学校の指導を生かした支援が有効であった。話し合い等の交流が活性化することで、想定した学習過程（個別学習→グループ学習→個に戻る学習など）を実現することができた。

2 今後の課題

「読むこと」における研究に焦点をあてたが、新学習指導要領の完全実施に伴い、他領域においても授業実践を通して、研究成果を検証していく必要がある。また、整理できた四つの要素についても、構想と実践を継続することで見直していかなければならない。

そのために、年間指導計画を作成し、それに基づき生徒の実態に即した単元を貫く言語活動を設定し、授業を進めることを大切にしたい。特に、小学校の学習につながる学習から始めるために、単元構想を工夫し、中学校最初の学習の準備を整えることが重要だと考える。「各学年の目標及び内容の系統表」を活用し、小中の指導の系統性をつかむ教材研究を進め、同僚と協働して授業改善に取り組みたい。

3 終わりに

研究協力員と教材研究や授業分析を重ねながら授業を進めていくことは、授業構想を生徒の学習状況から一つ一つ授業として具現化していく過程であった。生徒たちが学習について生き生きと語り合う様子や、実践後に「今後も、生徒自身が自分で目的意識をもって、意欲的に学習できるような授業を工夫していきたい」と研究協力員から感想を得られたことが自分の喜びであった。

最後に、本研究の授業実践にあたり、福井市成和中学校、ならびに研究協力員の岩佐直美教諭には、多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

《引用文献》

- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社、p. 7
- 富山哲也(2010a)「課題解決型の言語活動を取り入れた授業づくり」『実践国語研究』No. 300、明治図書、p. 77
- 三浦修一(2008) 高木展郎編『各教科等における言語活動の充実 その方策と実践事例』教育開発研究所、p. 48
- 福井県教育委員会(2010)『GOOD 授業ナビ III 〈国語 中学校用〉』
- 国立教育政策研究所(2011)『平成二十二年度 全国学力・学習状況調査 解説資料 中学校国語』p. 7、pp. 56-59
- 福井県教育研究所(2010,2011)『第58次福井県学力調査報告書』『第59次福井県学力調査報告書』
- 白井真実(2010)『京都市総合教育センター 研究紀要 No.542』
- 愛知県総合教育センター(2011)『第51回 愛知県総合教育センター研究発表会 第1部会 当日配布資料』
- 富山哲也編(2010b)『〈単元構想表〉でつくる! 中学校新国語科授業START BOOK 第1学年』明治図書、pp. 8-13

《参考文献》

- 梶田叡一・甲斐睦朗(2009)『「言語力」を育てる授業づくり・中学校』図書文化
- 富山哲也・三浦登志一(2010)『〈単元構想表〉でつくる! 中学校新国語科授業START BOOK 第2学年』明治図書
- 舟橋秀晃(2011)「学び合い高め合う国語学習の創造」滋賀大学附属中学校教育研究発表協議会教科別指導案綴